

千葉市美術館
アーティストプロジェクト
報告書

つくりかけラボ 11
金田実生 | 線の王国

会期
2023年
4月17日(月) - 7月2日(日)

アーティスト
金田実生

テーマ
五感でたのしむ

概要
つくりかけラボは、「五感でたのしむ」「素材にふれる」「コミュニケーションがはじまる」いずれかのテーマに沿った公開制作やワークショップを通して空間を作り上げていく、参加・体験型のアーティストプロジェクトです。第11回は、油彩、ドローイング、版画と、一貫して平面作品を手掛けて高い評価を得ている作家金田実生さんをお迎えしました。「線の王国」では、来場者が毎週火曜日の王様の指令に従って線を描き重ね、参加した全員の線が重なり合っ、空間を圧倒する力強い表現となりました。



金
田
実
生

線の王国

絵を描く、立体的な作品を作る、空間を構成するなど、作品表現の方法はさまざまです。どのような表現にも関わってくるのが線です。何かを作り上げるとき、線を使って表現のやりとりが始まります。そこから作品はあらゆる方向へ展開していくのです。だから線をたどってみるのはどうでしょう。線はシャープペンシルで書き出される細くて硬い線や、定規で引くまっすぐなかたちだけではいけません。太くて力強い線、面のような線。ゆらゆらと揺れて頼りない線。飛び出してくるような弾む線。描き始めると多彩なかたち生まれます。目に見えないものも描きあわすことができるかもしれません。身体性を使って思い切り動いて描く。目をつぶって自由に描くのも面白い。線を探って線の王国を旅してみましょう。

Mio KANEDA
Kingdom of Lines

金田実生



最初は何も無い白い壁の王国。



来場者が線を引き重ねていきます。

Open workshop 王様からの指令

金田さんのメッセージをきっかけに、線の王国の王様が、毎週火曜日に出す指令に従って、参加者は指定された色で線を重ねていきました。



4/17

立っ場所をきめて移動をせず、5種類の線(「ぐりぐり」「カサカサ」「ふにゃふにゃ」「ピンピン」「ビヨビヨ」)をかいてみよ!
色=黒



5/9

できるだけ長いヨコ線をかいてみよ ※タテ線じゃないぞよ
色=緑



5/16

手のとどいちはん高いところ、低いところにヨコ線を引いてみよ
色=緑、ピンク



6/1

透けて見える紙を上から全面に貼りました



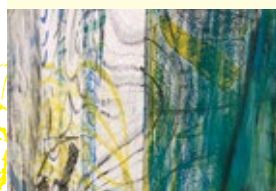
6/6

すけて見える線をまねしてかいてみよ
色=青系、茶系



6/27

壁の紙をビリビリ一つと手やヘラでむいて線をつくってみよ。
1本むいたら、1本かくのじゃ。王の島にも線をかいてよいぞよ。
色=白、黄色、青、黒



4/25

線と線がかさならないようにかいてみよ
色=黒、白、黄色

5/1

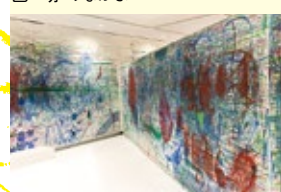
透けて見える紙を上から全面に貼りました

5/2

ジャンプ、すわる、うでをぐるぐる、など運動しながら線をかいてみよ ※両手に持っても良いぞよ
色=青

5/23

下から上に向かって線をかいてみよ くたびれるががんばるのじゃ
色=赤のなかま



6/13

音楽を聞きながら5本の線を同時にかいてみよ。「王の島」にもかいていいぞよ
色=グレー系、緑系、オレンジ系



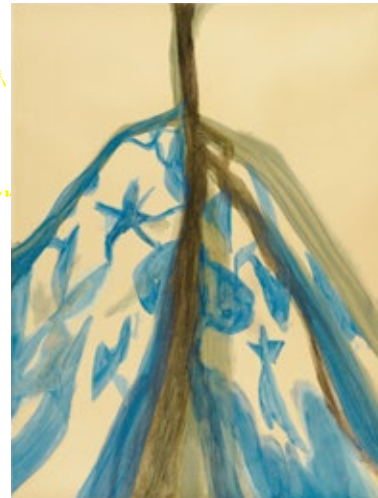
5/30

「王の金色の線」に向かって線を集めてみよ
色=明るい色

02 つくりかけラボ 11 金田実生 | 線の王国



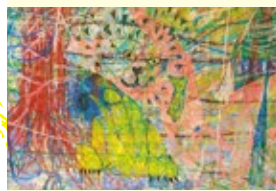
《流れと歪み》



《陰の衣ずれ》

金田実生 | 1963年東京都に生まれる。1988年多摩美術大学大学院修了。2005年文化庁新進芸術家国内研修員。1980年代末より作品発表を始める。近年の主な展覧会に「アーティスト・ファイル2009—現代の作家たち」(国立新美術館/東京、2009年)、「クインテット—五つ星の作家たち」(損保ジャパン東郷青児美術館/東京、2014年)、「みつめる—一見ことの不思議と向き合う作家たち」(群馬県立館林美術館/群馬、2019年)。府中市美術館をはじめ、群馬県立館林美術館、文化庁、広島市現代美術館、徳島県立近代美術館に作品が収蔵されている。

最初の線が現れた。



ライオンも現れた。



むいた紙を敷き詰めた来館者も。



床も壁も線で一杯になっていきます。奥の壁は王様の壁、金田さんの公開制作

ちからと時間の音色

若いふたりが楽しそうに部屋に入ってくる。話しながら画材を選んでいるようだが少しすると話し声が聞こえなくなった。そのかわりに長いことゴリゴリゴリゴリとチャコールペシルの音がしてガーッとかザーッとかいう長さを思わせる音も聞こえてくる。なにか張りつめた気配を感じて私は振り返る。ふたりは瞬きもしないで真剣に無駄なく手を動かす。ちからが入る。そこにはさまざまな線で描かれた躍動的なかたちが姿をあらわしていた。

またふたり、小さな紙に文字を書くように少しだけ腕を動かしていた。そのお父さんと少年は私の視界のなかで遠慮がちにそっと動く。しばらくすると私の視界が騒がしくなってきた。少年は床に備わった「島」の周りをぐるぐると駆け巡る。ピンク色や赤色が吹き出し、あっという間に色彩が混じり合う立派な島を作り上げた。

それは、一番はじめは少年だった。彼はふらりと入ってくると真っ白な世界にゆるゆると黒い線を放った。大きくて真っ白な世界に負けないつよさを持った柔らかく穏やかなかたち。少年は知らぬ間にいなくなって、そこには静かだけれどちからが漲る線が残されていた。

人々がやってきては自分の線を残していく。とても長い間たくさん見つめて考える。時には太くつよく、そうでなかったら細く点々と柔らかく。リズムカルな音を立てて青色や緑色、黄色や白や茶色が繰り返される。色とりどりの線が多く時間の時間と行為をあらわし濛々と折り重なっていった。軽やかに色が合わさり、それから以前の色と響き合う。今を少しめくればあの時の線が思い起こされた。

最後は紙をめくり、破りとり、剥がして線を起こす。壁や紙のでこぼこと多様な階調が交わって豊かな線が蒐集される。そしてまた最初の白があった。全ての時間の層があらわになってそこには人々の印があふれていた。

金田実生(かねだみお)



引き出しにも、金田作品。上に乗せた本は金田さんのおすすめ。

workshop, event

5/5 [金・祝] ワークショップ

「浮世絵の線を使って私の絵を描こう」

参加者数=38人

金田さんは、「線」をテーマにしたワークショップを、千葉市美術館が所蔵する浮世絵とコラボレーションさせる形でやりたい、と企画。つくラボとコレクションを掛け合わせた、新しいかたちのワークショップでした。



はじめに、参加者のみなさんに渡されたのは、なんとアイマスク。3色のクレヨンを選んだら、アイマスクをつけ、なにも見えない状態で線を描いていきます。思わぬ線との出会いで、線の可能性を体感することができました。



金田さんが、水をつけた紙の上に絵の具を乗せてぼかしたり、グラデーションを描いたり、何通りもある線の描き方をいろいろな画材を使ってデモンストレーション。



自由に、思うがままに、線を描いていきます。困ったことがあると、金田さんが「作品から離れて見てみて」、などアドバイスをしてくださいました。ラメが入った絵の具や綺麗な青色、自分で色を作る人や黒を巧みに使う人も。どんどん個性的な画面ができていきます。



このワークショップのために、千葉市美術館が所蔵する月岡芳年《風俗三十二相 けむさう 享和年間内室之風俗》から、「煙の線」だけを抜き取った版木で摺られた紙が用意されました。参加者のみなさんは、ここに自由に線を描いていきます。

最後に、できあがった作品を並べてお披露目会。一点ずつ見ながら、作者と金田さんのコメントを聞きました。小さい子の集中力が切れることもなく、最後は拍手で終了!

ワークショップ

「浮世絵の線を使って私の絵を描こう」を終えて昔の線と今の線は繋がるのだろうか。

今回のプロジェクトにあたり、千葉市美術館の主要コレクションである浮世絵版画と何らかの接点を持って取り組みたいというのは、当初から金田さんが考えていたことでもあった。美術館の所蔵品データベースで画像公開されている2000点余りの浮世絵版画全てに目を通したそうで、このうち選ばれた13点を、作家のコメントと共に5階の常設展示室で展示した(「金田実生の選んだ浮世絵の線」5月2日~6月4日)。つくりかけラボと他の館内施設の繋がりとというのは、美術館としても以前からの課題であったので、この申し出は大変ありがたいものであった。

同時に企画されたのが、このワークショップである。浮世絵の線と、参加者の線のコラボレーションがどんな表現を産むのか、実は浮世絵が専門である筆者にとってもワクワクの課題であった。このワークショップに選ばれたのは、上記の13点から、明治時代の浮世絵師月岡芳年の《風俗三十二相 けむさう 享和年間内室之風俗》[大判錦絵明治21年(1888)]の煙の部分の線である。金田さんが展示室のキャプションのために書いた文を引用してみよう。

煙という存在を線のみで表現してすごい。やや太くなったり切れかけたり、有機的な線が強弱と方向性を示しゆらゆらと昇っては消える。その形を目で追いかけるように見ることができる。

印象的なこの煙の線は、アダチ伝統木版画技術保存財団の彫師が新たに彫った本格的な板木で、美術館ボランティアによって汎紙苑(ばんしおん)という和紙風の紙に摺られた。参加者全員にその136年前の「線」を配布したところで、筆者が浮世絵版画の技法を解説、そして金田さんによる様々な線の実演を通して、参加者は線のイメージを豊かに広げていったものと思う。

「浮世絵の線は決して古くない」——金田さんがこの時間に発した言葉が印象に残っている。昔の線は、決して遠い存在ではなく、今も共に存在できる生き生きとした線なのだという肯定は、参加者の線を自由に開放したのであろう。このワークショップでも、線の王国において行った「王様に申し上げたいこと」の中でも「自由に描けてよかった」という感想は意外と多い。自由であることの体験は、昨今それほど珍しいことなのか。

結果、昔の線にのびのびと自由な参加者の線が気持ちよくコラボし、思いがけない芸術作品が多く生まれた。そのまましておくのもったいなく、線の王国のある美術館4階のガラス面に全てを掲示した次第である。

(当館副館長 田辺昌子)

5/28 [日] トークイベント

「線・ドローイングをかたどる話— 彫刻、コンセプトアート、絵画を横断して」

参加者数=16人

アーティストの森田浩彰さん、彫刻家・詩人・アーティストの利部志穂さんをお招きし、それぞれの制作のなかでドローイングがどのような操作をもたらした表現のスイッチとなるのか、金田を交えて作家のひらめきに至る「思考の線」を奥深くまで辿りました。森田さんが作品をインストールするまでの繊細で秩序ある思考のドローイング。利部さんが持つ数々の表現を貫く、制作の根幹を抜き出したドローイング。お話が進んでいくと、聴いている私たちもお二人の作品ができ上がっていく過程を伴走しているかのようで、極めて興味深い体験となりました。(金田)

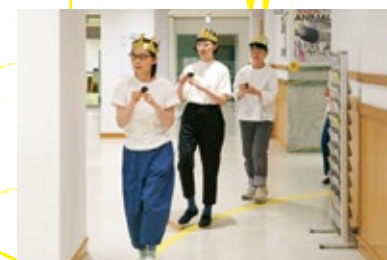


6/18 [日]

♪ サバティカルカンパニーもやってくるよ!

参加者数=30人

チリンチリン、チリンチリン…王冠を身につけたサバティカルカンパニーの4人(杉浦藍、益永梢子、箕輪垂希子、渡辺泰子)がベルを鳴らしながらやってきた!音楽家の野内俊裕さんと共に、エアボンブやピアノ、ギターを使った独自の音楽が響き渡ります。晴れ晴れとした音色と穏やかだけれども意外性のあるメロディーが奏でられワクワクできます。サバカン主導で金田も加わり「線の王国」にちなんでドローイングと音のコラボレーションも行われました。線を描く音が野内さんによってサンプリングされ、新しい音となって鳴り響きます。最後には野内さんのギターとハモニカで会場が音いっぱいになり、夢のような時間はあっという間に過ぎゆきました。(金田)



Special open workshop

Happy Hour! スペシャルな画材がおすすめです!

5/6(土)、5/20(土)、6/3(土)、6/10(土)、6/24(土)、7/1(土)

10:30~12:00と13:30~15:00

参加者数=220人

アクリル絵の具や木炭、太い筆や細い筆、絵具がポタポタ垂れても平気、ビニールエプロンもあるから大丈夫(だったかな?)。いつもは出てない画材が加わって、ちびっこ画伯も大活躍。美術館ボランティアさんたちはてんやわんや。この時間は、まさにスペシャルなハッピーアワーでした。(田辺)



線のかさなる先に

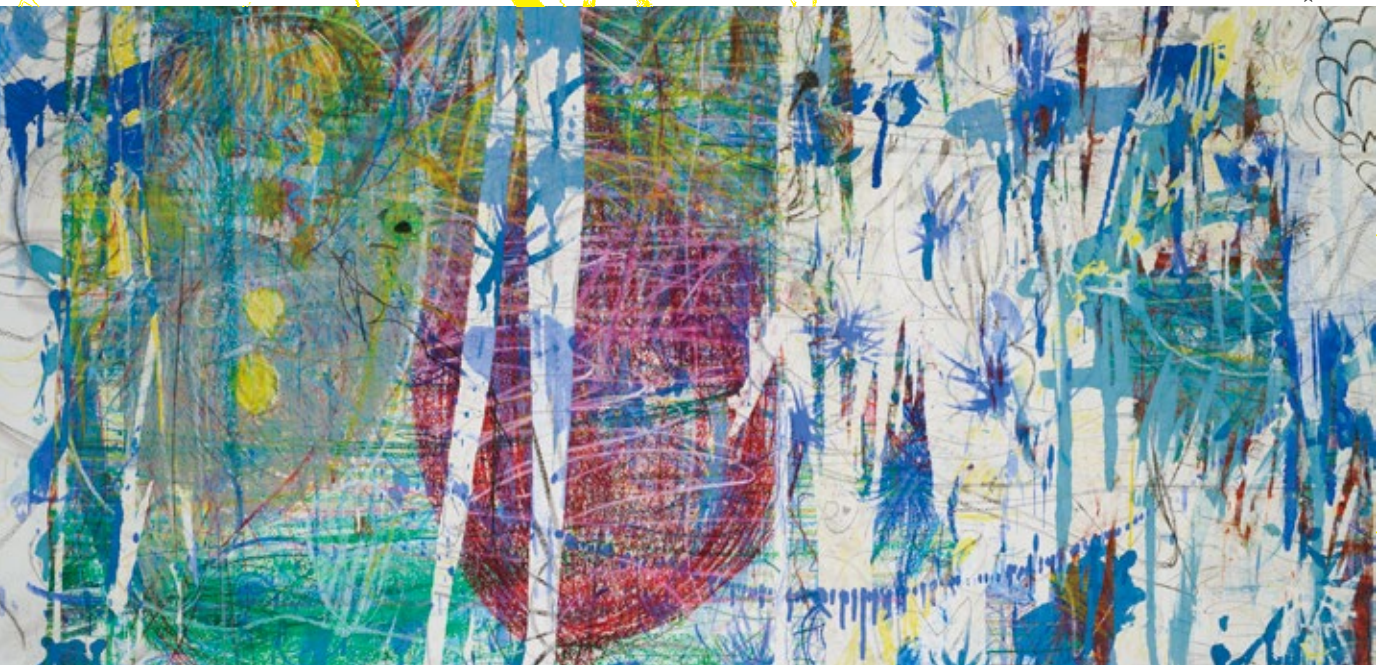
文字を書く、イメージを描く、関係性を分ける、私たちは日々「線をひく」ことを重ねている。あまりに当たり前の営みであるから、そのことについて改めて注目することはあまりないかもしれない。しかし、線をひくごとに自分があらわれ、その線で私の世界をつくっていく。線は私そのものである。

「つくりかけラボ11 金田実生「線の王国」は、作家と来場者による線という私を通じた対話の場だ。そこは、エレベーターを降りてすぐの入口にある金田と来場者による対話の壁と、その奥で展開する金田自身の対話の2つの要素からなる。対話であるとはいえ、日々線に自覚的な金田と、そうとも限らない来場者との間に距離がないわけではない。そうであるから、金田と来場者による対話の場ではそのギャップを埋めるように、週ごとに線を描くヒントが「王様」から届けられる。

「立つ場所をきめて移動をせず、5種類の線を描いてみよ」
「ジャンプ、すわる、うでをぐるぐる、など、運動しながら線をかいてみよ」
「手のとどくいちばん高いところと、低いところにヨコ線を引いてみよ」

ここには日常の何気ない場面を線の手で捉え表現を重ねた金田のまなざしがつまっている。金田の線から対話が始まり、そこに来場者によるさまざまな線が重なりあう。見るからにはつらつとした線や、時にためらいを感じる線、また線であることをあきらめた線が、それぞれの線の調子を伺いながら互いに関係を展開する。線をひくという指令には、絵を描くという指令ほどに、上手いとか下手といったことは現れないから、ここには大人と子どもといった区分けも存在しない。気づけば金田も来場者も想像しなかったコミュニケーションが次々に展開していく。これを受けて、入口向かって奥の壁面ではもう一つの金田自身による線の対話が展開する。入口を中心に展開している金田と来場者の大胆に重なった線に、画家・金田が呼応し、金田の作品が纏う落ち着いたあたたかな空気をたたえながらも、ここでしか見られない金田のまよいのない線が力強く広がっていく。「線の王国」は、線という私を通じて、金田と来場者が今

☆



金田実生《言葉は透明になって漂う》2023年 千葉市美術館にて公開制作

☆

ここにしかない関係を重ねようとした軌跡である。その交点には、金田も来場者も思ってもみない新しい私が見えてくる。

ドイツの社会学者・ジンメルは、人と人の相互作用という糸が社会を存在させると考えた。ジンメルにとって社会とは、現れては消える相互作用という無数の糸で織られた織物で、その糸は人によって絶えず変化するから、その糸で織られる社会もまた絶えず変化する存在であるとする。ジンメルの考える社会のあり方は、今なお、私たちの何気ない日々の暮らしの中でも実体験として納得できるものではないだろうか。この「線の王国」では、私をまとった物理的な線が重なり合い、ひとつの王国という社会を作り上げる。普段であれば見過ごされる、現れては消える私たちの痕跡を、ここではあえて線としてかたちにして残すことで、そこに生まれる小さな関係性に自覚的になる。今日の美術の文脈で当たり前に使われるようになった関係性というキーワードは、その言葉が当たり前になればなるほど、実は関係性そのものに正面から向き合う機会が減りつつあるのではないか。私たちをまとった物理的な線の重なり合いが、今日の私たちに我々が関係しながら生きていることの本質を強く実感させる。「線の王国」にあらわれる、思ってもみない偶然性の中から生まれた線の重なりは、私たちの社会そのものである。

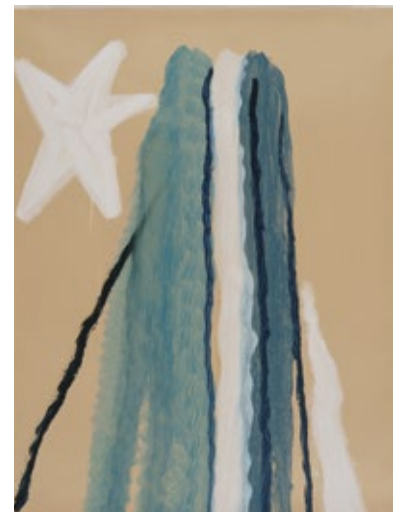
そこには思わぬ社会の縮図もあった。来場者の一人として王国という社会に挑戦を挑んでみたけれど、ウツボくらいの気持ちで描いた線が、結局具合の悪そうなシラスウナギみたいになってしまった。線は私そのもの…これが私の現実、やはり王様の線は格別である。どんなに線をひくことが私たちの無意識的な日常的行為であったとしても、やはり王様と私の線の間には大きなギャップがありすぎたようだ。王様と私の間、私と私の間に埋められない差があることもまた、社会そのものということだろうか。

自分という線をひくことを通じて参加するこの「線の王国」は、画家という仕事の普遍的な価値を浮かび上がらせながら、私たちの社会をそっと見つめていたのかもしれない。



《雨を待つ人》

☆



《星と頂》

☆

つくりかけラボ11
金田実生 | 線の王国

会期
2023年4月17日(月) - 7月2日(日)

主催
千葉市美術館

協力
ANOMALY

ゲスト
森田浩彰
利部志穂
サバティカルカンパニー
野内俊裕

アーティスト滞在日
4月17日(月)、22日(土)、23日(日)、
29日(土・祝)、30日(日)
5月5日(金・祝)、6日(土)、13日(土)、
14日(日)、20日(土)、21日(日)、27日(土)、
28日(日)
6月3日(土)、4日(日)、10日(土)、11日(日)、
17日(土)、18日(日)、24日(土)、25日(日)、
7月1日(土)、2日(日)

来場者数
4,054人
(大人3,062人、高校生92人、
中学生以下900人)

「つくりかけラボ11」
金田実生 | 線の王国 | 報告書

執筆
金田実生
立花由美子
田辺昌子

撮影
長塚秀人 ☆印の写真を撮影
千葉市美術館

デザイン
北風総貴(ヤング荘)
表紙フォーマット
加藤賢策(LABORATORIES)

印刷
三永印刷株式会社

編集・発行
千葉市美術館

発行日
2023年9月30日

